開聞地域

国指定有形文化財

松梅蒔絵櫛笥付属品竝目録共（まつうめまきえくしげふぞくひんならびにもくろくとも）一合（いちごう）

国指定有形文化財　松梅蒔絵櫛笥付属品竝目録共　一合

松梅蒔絵櫛笥付属品竝目録共、一合は、枚聞神社の宝物庫に保管されている美術工芸品です。表面に松や梅、鶴、亀などを金粉で描いた蒔絵が装飾された化粧箱で、中には円形の手鏡が大小２枚、櫛が３点、その他小壺などの化粧道具が入っています。作者や伝来は明らかになっていません。

昔は枚聞神社の本殿に納められており、「玉手筥」などと呼ばれて大切にされてきました。

化粧箱の目録には大永３（１５２３）年の年号が記されているため、室町時代の高貴な女性の持ち物と推定されています。

県指定天然記念物

縄状玄武岩（なわじょうげんぶがん）

縄状玄武岩

玄武岩とは、地表や地下の浅いところで急激に冷えて固まった溶岩の一種です。

開聞岳のふもとの花瀬から田崎の海岸にかけて露出する玄武岩は、紀元前５００年頃の開聞岳の大爆発のときに流れ出たものと推定されています。

住所：宿市開聞十町１３６６

す。

玄武岩は、ガラスの主成分でもある二酸化ケイ素の含有量が比較的少なく、流動性に富んでいます。そのため、地表に流れ出た際に、障害物があるとうねうねと曲がったり縄状にねじれたりしてユニークな自然地形を形成します。

日本で見られる溶岩は、桜島にあるようなゴツゴツとした砕塊溶岩がほとんどですが花瀬海岸は、沖へ向ってドロドロと流れ出た溶岩の様子を見ることができるとても貴重なポイントです。

縄状玄武岩は、火山と大地の活動を知ることができる珍しい溶岩です。

住所：指宿市開聞十町４２０８－１１

県指定有形文化財

枚聞神社本殿（ひらきじんじゃほんでん）

枚聞神社は薩摩国の一の宮ですが、創建がいつなのかはっきりしません。文書に現れる最初の記録は、貞観２（８６０）年の『日本三代実録』です。

枚聞神社は、貞観１６（８７４）年の開聞岳の噴火により、一時期、揖宿神社に御神体を移したといわれています。現在の本殿は、慶長１５（１６１０）年に島津義弘が寄進したもので、その後、天明７（１７８７）年に島津重豪が改築しています。

枚聞神社本殿。背後には御神体の枚聞神社が聳えています。

社殿の正面に勅使殿があり、その奥に拝殿・幣殿・本殿と並んでいます。

本殿は、千木、鰹木を銅板葺きの屋根にのせた入母屋造となっています。総朱塗極彩色で、特に雲竜の彫刻の入った向拝柱（龍柱）は製作技術の高さを示しています。

これらの建物

には、「奉再興嶋津兵庫入道慶長十五庚戌年九月九日」の銘が入った擬宝珠が使用されています。

建立や修理などの棟札も、現存しています。また、宝物殿には国指定文化財をはじめとして、貴重な文化財が多数展示されています。

瑞応院跡

市指定史跡

瑞応院跡（ずいおういんあと）

枚聞神社の西側一帯には、江戸時代まで瑞応院という寺がありました。瑞応院は、枚聞神社の別当寺（神社に付属していた寺）で、智通僧正によって白雉３（６５２）年に建てられたとされます。

その後、数百年の間、廃寺となっていましたが、正中３（１３２６）年に島津氏が舜請和尚に再興させ、坊津一乗院の末寺となりました。

住所：宿市開聞十町１３６６

住所：指宿市開聞十町１４０６－１

瑞応院跡地石棺出土跡

明治初期の廃仏毀釈に至る約４５０年の間、六十数代の住職がおり、枚聞神社までを司り、神領（枚聞神社の所領）二百六石の内、百七十九石を授けられ、大きな権力を持っていたようです。

また、瑞応院には島津元久・家久の位牌が安置されており、頴娃郷の菩提寺でもあったとされています。

本尊は、廃仏毀釈の難を避けるため、埋め隠されましたが、明治１２年に掘り出され、現在は南さつま市（旧坊津町）久志の広泉寺に安置されています。

また、昭和６２年には西側駐車場で、江戸時代の石棺が発見され、棺内には９３枚の古銭が入れられていました。

市指定史跡

入野原石塔群（いりのはらせきとうぐん）

入野原石塔群は、石塔の造りや形などから室町時代くらいのものではないかと推定されています。

開聞宮由緒古跡紀方帳（かいもんぐうゆいしょこせききほうちょう）には、瑞応院から2キロメートルほど西の入野原に小四郎（こしろう）の塚があると記されています。

小四郎は、頴娃家の相続争いで、兄九郎と瑞応院の住職を殺し、第七代の頴娃城主・頴娃久虎（えいひさとら）となった人物です。

ただ、現在残っている石塔群が、小四郎や頴娃氏に関係するものかどうかは分かっていません。

この石塔は、現在地の西南約100メートルのところにありましたが、昭和60年度の区画整理事業の際に現在地へ移設しました。

入野原石塔群

住所：指宿市開聞十町４７５４－１６

市指定有形文化財

天の岩屋供養塔群（あまいわやくようとうぐん）

開聞岳の麓、登山道の脇に「岩屋どん」と呼ばれる場所があります。

ここには、現在複数の板碑（いたび）と五輪塔（ごりんとう）の壊れたかけらが建っています。室町時代のものと江戸時代のものがあり、いずれも当時の人々が死後のめい福を祈って生前に建てたものです。

この岩屋には、次のような伝説が残っています。

「ある僧侶（塩土翁（しおつちのおきな）とも）が、岩屋で法水（修行のために身体を洗い清めるための水）をくんで37日間の修行をしているところに1頭の雌鹿（めじか）が現れ、法水をなめました。すると、雌鹿はたちまち身ごもり、気品の高い女の子が生まれました。

瑞照姫（ずいしょうひめ）と名付けられた女の子は、知通和尚に育てられ、後に

天の岩屋供養塔群

天智天皇の后になり、大宮姫と呼ばれたそうです。

市指定有形文化財

松原田観音寺跡石塔群

開聞古事縁起によると、昔、松原田一帯に観音寺が建てられていたそうです。しかし、廃寺になったり、明治の廃仏毀釈で破壊されたりした結果、六地蔵塔や五輪地蔵塔、板碑等は、永い年月にわたって地中に埋もれて散逸したままとなっていました。

住所：指宿市開聞十町２５８０

その後、昭和2年に公民館敷地を整地するとき、埋もれていたこれらの供養塔を掘り出し、保存しました。

そして、昭和59年に行われた公民館改築の際、現在地に移設し、種類ごとにまとめて安置し直しました。なかでも、大永2（1552）年8月と記されている六地蔵塔は、この地方で最も古いものです。

市指定有形文化財

瑞応院中興開山舜請の墓

舜請法印（法印＝僧の最上位の役職名）は、小納言阿闍梨と号し（本名のほかに別の名前を名乗ること）、正中3（1326）年に瑞応院を再興しました。

舜請は、応永27（1420）年11月27日、131歳で亡くなったといわれています。舜請の墓は枚聞神社の東に建てられており、3基の宝筐印塔の中央にあります。左右の2基は南向きに建てられていますが、舜請の墓だけは神社の方（西向き）を向いています。墓が神社の方を向いているのは、舜請が御神体の御化粧の不都

住所：指宿市開聞十町１１８８

合で神罰を受け、目玉が飛び出したことに対して深くざんげし、生きたまま墓の中に入り、7日7夜、輪を鳴らし、神社の方を伏して拝み死んでいったためと伝えられています。

瑞応院中興開山舜請の墓

住所：指宿市開聞十町１３５９－３

市指定有形文化財

上野神社周辺供養塔群（うえのじんじゃしゅうへんくようとうぐん）

開聞古事縁起によると、上野集落は、舒明天皇（じょめいてんのう）の子孫にあたる上野少将左衛門大夫藤原豊若麿によって荘園化されたとあります。

上野氏系図によると、桓武天皇（かんむてんのう）の子孫である平良文の孫がこの地に来たと記されています。また、他家古城主由来記にも上野氏の名前が見られ、頴娃氏の一族として、この地域を治めたといわれています。

住所：指宿市開聞上野１９６３

上野神社周辺供養塔群

上野神社周辺には、こうした伝承との関連を思わせる「上野どんの墓」と呼ばれる百数十の供養塔群があります。比翼塚（ひよくづか）（愛し合って死んだ男女を一緒に葬った塚）とみられる2基の宝塔を中心に、周囲には五輪塔や板碑等、中世のものと思われる供養塔が多くあります。

伝承と供養塔群との関係には不明な点もありますが、昔から地域の人々は上野城主の墓として供養塔群の保存に努めてきました。昭和15年には、整地して神社を新築しています。

かつて、この地に暮らした人々の仏教信仰の深さをしのばせる大切な文化財です。

市指定有形文化財

上仙田東屋敷供養塔群

仙田瓦ケ尾一帯は、昔、仙田村東屋敷と呼ばれ、この地に住んでいた六兵衛（戒名は月秋浄井上座）が建立したといわれる六地蔵塔1基、五輪塔15基、板碑6基のほか、多くの供養塔の残欠が残っています。

元和8（1622）年に建立された六地蔵塔には、六兵衛が、この世の幸福と極楽に往生することを願って、伊勢神宮や熊野権現に参拝したことや33カ所を巡礼したことなどが刻まれています。

上仙田東屋敷供養塔群

住所：指宿市開聞仙田１７９１－３

市指定有形文化財

モクヨ山六地蔵塔

唐船峡東入口の近くには、ムクロジの大木の林があり、古くから「モクヨ山」と呼ばれています。モクヨ山には、天正10（1582）年に建てられた高さ2mの六地蔵塔を中心に、数基の五輪塔と板碑1基があります。六地蔵塔は笠の部分が破損していましたが、昭和56年に修復されました。

六地蔵塔には、頴娃城にいた平姓池田対馬守（平姓＝平氏の流れをくむ）が、天正8（1580）年に急死した次男・新三郎の成仏を願って供養したという碑文が刻まれています。

モクヨ山六地蔵塔

住所：指宿市開聞仙田１４４４

市指定有形文化財

興玉神社（九玉大明神）の棟札

仙田九玉原の興玉神社には、5枚の棟札が残っています。

棟札とは、棟上げのときに工事の由緒、年月日、建築者、工匠（飾りや工作を作る職人）などを記して棟木に打ちつける札のことです。最も古いのは、天文5（1536）年12月20日と記された棟札で、頴娃氏第4代兼洪の時代のものです。

頴娃氏の延命（長生き）、子孫繁昌、武運長久（戦に勝つ運命が長く続くこと）、郡内安全の祈願などが記されています。兼洪の家来の竹内実通が、大工の田中左近太夫、鍛冶職人の上野景勝に命じて九玉大明神の再建造を行ったときのものです。このほか、正徳2（1712）年、安永4（1775）年、寛政元（1789）年、文化5（1808）年の棟札が残っています。

興玉神社（九玉大明神）の棟札

住所：指宿市十二町２２９０
（指宿市考古博物館内で保管）

市指定有形文化財

九郎塚と頼宗塚

開聞小学校の敷地にあり、地元の人々に九郎塚（クロドン）、頼宗塚（デスドン）と呼ばれている2つの塚には、次のような話が伝えられています。

頴娃6代城主兼堅の子・九郎には、兼堅の側室の子である小四郎という弟がいました。兼堅の死後、この異母兄弟の間で、頴娃家の相続争いが起こりました。小四郎の母親は、わが子に頴娃家を継がせようと、兄の九郎をひどくいじめました。事情を伝え聞いた

上段：九郎塚　下段：頼宗塚

島津貴久は、九郎に深く同情し、自分の近くに住まわせました。

ところが元亀２（１５７１）年貴久が亡くなり、九郎は後ろ盾を失ってしまいました。頴娃家の実権を握っていた小四郎の母親は、小四郎を城主にしようと謀りました。九郎を支持する農民たちは、九郎に頴娃城へ帰ってくるよう嘆願しました。九郎は一旦頴娃城に戻りましたが、城の中に温かく迎える人はいなかったのです。意を決した九郎は、元亀２（１５７１）年７月１３日、６３人の家来とともに枚聞神社に立てこもりました。

７月１７日、九郎を支持する農民たちは城に攻め込みました。しかし、戦闘に不慣れな農民たちは返り討ちに合い、九郎らもたちまち兵に取り囲まれてしまいました。

瑞応院１４代住職であった頼宗は、九郎をかくまい、坊之津の一乗院に逃がそうとしましたが、兵士に見つかり、九郎とともに殺されてしまいました。

二人の悲しい死を悼んだ村人らは、九郎と頼宗が亡くなった場所にそれぞれ塚を建て、二人を供養したそうです。

住所：指宿市開聞十町２７７２（九郎塚）
指宿市開聞十町２５１９－４（頼宗塚）

市指定史跡・有形文化財

鳥越堀切と決湖碑

現在、池田湖には６つの河川がつながっています。その中の１つ、池田湖南側の「新川」のみが流出河川で、宮田川と合流して川尻漁港へと続いています。この川は、江戸時代から明治時代にかけて行われた大工事によって造られたものです。

島津斉彬は二月田温泉に滞在中、指宿は水利に乏しく田んぼが少ないことから、池田湖の水を灌漑に利用することを考案しました。

早速、郡奉行に命じましたが、郡奉行は水神の祟りがあるとして、

決湖碑

これを恐れたといいます。

それを聞いた斉彬は、こう命じたといいます。

「水神が何ぞ民益になることを妨ぐるべき、神は人民に幸を与ゆるためにあるもの、そのようなことは妖言である。よろしく民益を起こす趣を神に告げ、速やかに着手すべし」

こうして池田湖の壁、つまりカルデラの外壁を約２０メートル掘削し、開聞の仙田方面に水を引く鳥越掘削工事が、安政（あんせい）４（１８５７）年に始まります。

しかし翌年、斉彬は逝去してしまい、さらに今和泉島津家の領地８０町歩の干拓を目指して始まった一大事業も明治維新によって中断してしまいます。

掘削中の鳥越堀切

その後、明治５（１８７２）年に県令大山綱良（おおやまつなよし）がこの事業を再開させます。工事には串木野鉱山の労働者たちも動員されました。莫大な工事費と延べ１１万人余りの作業員を費やす難工事でしたが、明治９（１８７６）年、ついに「鳥越堀切」は完成します。この工事によって池田湖は初めて海へ流れ出る河川とつながることとなり、開聞仙田に新田が造成されたことを記念して、同年には「決湖碑」が建てられました。

この碑文には難工事であったことや池田湖の湖面が下がったこと、新たな耕作地として水田や桑田を開墾したこと、当時の役人の名前などが刻まれています。

調所笑左衛門廣郷（ずしょしょうざえもんひろさと）が財政再建に取り組んだ天保年間、指宿では大型公共事業が相次いで行われました。

「鳥越堀切」と「決湖碑」は、江戸時代から明治時代初期にかけての「近代化遺産」の１つとして価値が見いだされ、平成２５年３月、市の指定文化財に指定されました。当時の優れた技術と先人たちの苦労と努力の跡がしのばれる文化財です。

住所：指宿市開聞仙田１６８５－６
１７０５－１０

市指定有形文化財

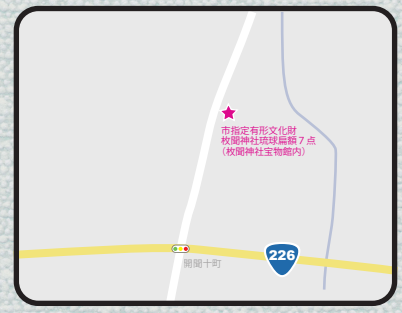
枚聞神社琉球扁額7点

今から400年前、鹿児島藩は幕府の許可を得て、琉球王国を統治していました。そして、統治の証として、毎年、琉球から使節団が鹿児島を訪れました。

枚聞神社の宝物殿には、江戸時代に琉球使節から奉納された扁額が7枚飾られています。扁額とは、門戸や室内などに掲げる横に長い額のことです。

琉球扁額は、県内に十数枚残っていますが、最も数多く残っているのが枚聞神社です。それは枚聞神社が、琉球からの使節が鹿児島を訪れる際、航海の目印にした開聞岳を祭る神社であったからといわれています。

枚聞神社の琉球扁額



住所：宿市開聞十町１３６６

枚聞神社の酒甕

枚聞神社宝物殿に、大きな甕があります。これは、現在の愛知県一帯で生産された「常滑焼」の甕であり、約650年前に作られたものであると考えられます。神社の伝承によると、豊玉媛が玉ノ井で水をくんだ甕を、酒作りの甕として代々使っていましたが、正治元（1199）年11月3日の台風によって、社殿が壊れ、豊玉媛の甕も割れてしまったと言われています。このため、神社の神官が京都に上京して作らせた甕が、現在残るものとされています。

江戸時代に編集された『三國名勝図会』にも挿絵入りで紹介され、神社のお神酒を作る酒甕として使われたことが分かっています。

酒甕は枚聞神社宝物殿内に展示されています。

住所：宿市開聞十町１３６６

『薩藩勝景百図』に描かれた鏡池と開聞岳

鏡池

江戸時代末期に編纂された『三国名勝図会』に、市を代表する名勝の一つである鏡池のことが書かれています。それによると、「周囲は5町余り（約545m）、深さは九尋余り（約16m）、池の中には大小の樹木の枯株が多くあり、嘉吉3（1443）年に池になったと言われている。形状は、大きな円鏡のようで、開聞岳の影を浸す。」と記されています。

また、『薩藩勝景百図』では、3人の男性が鏡池の縁にある松の木のそばで、雄大な開聞岳と静かな湖面の鏡池を眺めながら一休みしている様子が描かれています。

このことから、鏡池は古くから名勝として親しまれていたことが窺えます。

島津重豪奉納の「始生」額

枚聞神社には、第八代鹿児島藩主島津重豪が奉納した「始生」と書かれた扁額があります。

重豪といえば、藩校である「造士館」や、農業に必要な暦を作るために天文観測所「明時館」を設立した藩主として知られています。南九州最大の繁華街である天文館の地名は、この「明時館」に由来しています。

額に書かれた「始生」は、七十二候（気象や動植物の様子を例にあげて自然の移り変わりを示した暦）の中に、「葭始生」という

「始生」額

住所：宿市開聞十町１３６６

形で登場しています。

文字通り、葦（葭）が生え始める時期、現在の４月下旬ごろを表した言葉です。「よし」は、「善（よ）し」にも通じるため、おめでたい意味合いもあって「始生」の文字が書かれたのかもしれません。「始生」額は、島津重豪の枚聞神社に対する崇敬の深さを物語る奉納品の一つです。

日露戦争出征兵士凱旋門

日露戦争出征兵士凱旋門

枚聞神社の鳥居のそばには、三角柱の傘石が載せられた高さ３ｍの本柱と、高さ1・32メートルの脇柱で一組になっている石製の門柱があります。

この門柱は、日露戦争に出征し、輝かしい武勲を立てて凱旋した郷土の兵士を迎えようと建てられた凱旋門です。明治37（1904）年8月、旧頴娃村が、苙口の石切り場で切り出したものを用いて建立しました。

建立当時、凱旋門は西側の県道上にありましたが、昭和40年代の道路拡幅工事の際に撤去され、長らく放置されていました。

しかし、日露戦争終結80周年を迎えるにあたり、この由緒ある重要な文化財を後世に残そうと、有志らが立ち上がりました。そして、昭和60年10月、賛同者からの浄財を得て、現在の場所に原形どおり復原されたのです。

枚聞神社の鏡

枚聞神社には、長年にわたり多くの宝物が伝承されています。それらの中に、東京国立博物館に貸し出されている二枚の鏡があります。

一枚は、「草花蝶孔雀方鏡」です。青銅製で、中央に紐を通す穴を設けた正方形の鏡です。平安時代の終わりごろ（12世紀）に作られたものです。

住所：宿市開聞十町１３６６

鏡の文様は、中央から伸びた草花の周りを蝶が飛び、その下に孔雀が立っています。

もう一枚は「群蝶双雀鏡（ぐんちょうそうじゃくきょう）」です。青銅製の円鏡で、南北朝時代（14世紀）に作られています。中央には、蝶の群れと2羽の雀の文様があります。

草花蝶孔雀方鏡

群蝶双雀鏡

住所：宿市開聞十町１３６６

オリビンがあふれる砂浜

開聞岳の東にある川尻海岸には、約1㎞にわたってオリビンと呼ばれる透明な黄緑色の鉱物を含んだ砂浜が広がっています。この鉱物の宝石名は「ペリドット」といい、8月の誕生石にもなっています。

オリビンは、約3700年前の開聞岳誕生に伴う噴火によって、地上へ噴出されました。そして長い年月をかけて風化していき、やがて砂浜に堆積するようになります。

川尻海岸の浜砂に含まれるオリビンは、直径が0・5㎜程度のものから、2㎜に達するものまであります。オリビンがこの砂浜に多く残されているのは、普通の砂粒が簡単に波にさらわれるのに対し、オリビンは比重が大きいため、簡単にはさらわれず、多く残るから

開聞岳とオリビン

下仙田寺鼻の石造物群

開聞下仙田地区には、かつて旧峰山寿福寺がありました。旧峰山寿福寺は、旧頴娃町にあった島津久豊が開基した禅寺の証音寺の末寺で、下仙田地区に多くの関連施設があったといわれています。明治４（１８７１）年の廃仏棄釈により、他の寺院と同じく破壊されることになりました。

下仙田寺鼻の石造物群

下仙田地区の一角には、廃仏棄釈により壊された旧峰山寿福寺関連の石造物が集められ、地区の人々によって守り伝えられてきました。この石造物群は平成１９年１２月、葬儀会場建設に伴い、隣接地に移設されました。

移設先には、石塔籠１基、「奉造立」銘塔１基、板碑１基、大日如来石像１体、塔婆を彫った板状供養塔１基、家形石塔１基、無縫塔３基、五輪塔２基、墓３基、「大日如来」と彫られた石塔１基とその脇に自然石が１基設置されました。

また、板碑の背後には、「大」と彫られた大日如来石塔１基、自然石を用いた石塔３基が並べてあります。さらに、これらの石造物の後ろには、五輪塔の空風輪や火輪等が並べられています。

トカラ馬

開聞山麓自然公園には、トカラ馬という日本在来馬がいます。背中までの高さが１２０㎝程で、栗色をしたポニーのような小型馬です。たてがみや尾の毛が長く、濃い色をしていて、とてもおとなしく人懐こい馬です。かごしま文化財辞典によると、トカラ馬の歴史は明治３０年ごろ、喜界島からトカラ列島の宝島へ十数頭が移入されたことに始まると記されています。

戦前には１００頭前後が飼育されていたようですが、その後減り

住所：指宿市開聞仙田２５７６－２

続け、昭和27年には43頭になってしまいました。この年、専門家によって「トカラ馬」と名付けられ、純粋な在来馬として貴重な種類であることが確認され、翌年には県の天然記念物に指定されました。

しかしその後、島だけでの飼育保存が困難になってきたため、各地へ移して飼育保存することになりました。

自然環境が似ている開聞山麓に引っ越してきたのは、昭和38年ごろです。

トカラ馬

花瀬（はなぜ）

花瀬

花瀬、開聞獄の西麓脇浦の磯辺にあり。地頭仮屋より午方凡壱里拾弐町余

磯岩多く、町間量かたし、潮汐漲り流れ、岩間に潮溜まりて池の如し

底を臨めば、磯かきの類五色の色をなす、或は時にして出、或は時にして没す

四季共にあり、その形円形にして大小あり。大なるは圍五～六寸、小なるは三～四寸菊花に似たり、名づけて花瀬といふ

磯石間に蠣の種類多し、その中に形ち小にして舌あるものあり、土俗（地元の人）これを「勢い」といふ

蟶の字を用ゆるか、そのせいの類潮底にして、舌を吐て五色の色をなす。故にこれを見るに出没隠見定まらず、名づけて「花勢」といふ

その海岩急瀬の間にあるをもて俗に花瀬と呼ふといふ

獄の東、川尻浦にもまた花瀬あり、脇浦には劣れり

これは、江戸時代の後半に鹿児島藩が出版した『薩摩名勝志（さつまめいしょうし）』という地誌からの抜粋です。花瀬の海には、菊の花のような色とりどりの直径9～18㎝の生き物がいて、それが出たり引っ込んだりすることが書かれています。

また、この生き物を見ようとしても、あっという間に隠れてしまい、なかなか見ることができないことから地元では「勢い」と呼ばれており、「花勢」の名が付いたといわれています。

火山学者の成尾英仁氏は、「花瀬」の地名は、五色からなる不思議な生き物に由来し「花勢」が「花瀬」に変化したと述べています。この不思議な生き物について、博物学者の荒俣宏氏は「イバラカンザシ」と呼ばれる生物だろうと推定しています。

イバラカンザシは、温かい海に生息するゴカイの仲間で、赤や青、黄や緑など美しい色彩を帯びた鰓冠（さいかん）というエラを持っています。鰓冠は刺激を受けると素早く引っ込んでしまうため、前述の「勢い」という名前の由来になったと考えられます。

イバラカンザシ（山村秀雄氏提供）

住所：指宿市開聞十町４２０８－１１

「塩釜（しおがま）どん」の掛軸（かけじく）

川尻漁港の入口には自然石が３個並べられており、「塩釜どん」と呼ばれ、塩釜神社のご神体として祀られています。その由来については、その昔、この地に塩土老翁（しおつちのおきな）という神様が塩釜をつくり、二反歩（約2千㎡）ほどの日本最古の塩田を開いたと言われています。

また、川尻には「塩釜どん」を描いたとされる掛軸が古くから伝わっています。上部には開聞岳が空高くそびえ立っており、その麓に枚聞神社の屋根の一部が配置されています。前面には、３人の神様が並んでおり、中央は天智天皇（てんちてんのう）、向かって左側は大宮姫（おおみやひめ）、右側の不動尊（ふどうそん）の姿をしているのが塩土老翁と伝えられています。かつては正月二日に床の間（とこのま）に掲げ、塩神様の祭典を行っていたそうです。掛

「塩釜どん」の掛け軸

軸がいつ頃の作かは不明ですが、塩釜神社の由緒を表すために作られたのではないか推測されます。

また、江戸時代から明治時代の初めまでは、枚聞神社のお祭りの際、川尻の塩屋（現在の川尻上・北集落）と脇浦の塩屋、開聞岳を挟んだ東西の塩屋が、交替で塩を献納しており、この地が塩作りにとって重要な土地であったことが窺えます。

海神（かいじん）　開聞岳（かいもんだけ）

開聞岳は、今から約３７００年前の縄文時代後期に、阿多カルデラの西端に位置する海底噴火を皮切りに火山活動が始まり、その後、少なくとも１２回の噴火を繰り返し溶岩や火山レキ、火山灰が積み重なって陸続きとなり、海に突き出たような現在の姿になりました。

開聞岳（神）にまつわる最古の記録は、『日本三代実録』の貞観２年（８６０）の神位の昇叙の記録です。また、貞観８年（８６６）と元慶６年（８８２）に、神位が昇叙し、正４位下になりました。その理由について永山修一氏は、「開聞神が「祟」を成す性格、即ち噴火をおこすものであったため」としています。

さて、開聞岳は薩摩半島の最南端に位置し、標高９２４ｍで独立峰の薩摩富士とも呼ばれる姿は、遥か遠方からも望めることができ、古来から薩摩・大隅半島から南島にかけての航海の目標物とされてきました。これは、江戸時代に、開聞岳を「海門岳」と表記したことからもうかがい知れます。

山川港に入港する南島や琉球、中国との交易船の乗組員は、大海の遠路の中、航海安全を祈願する開聞岳を航海の目標物にしながら航海し、遥かかなたに開聞岳が見えた時には、さぞかし胸をなでおろしたことでしょう。

『三国名勝図会』には、航海中に開聞岳が見えると、船中で酒を酌み開聞神を祀ったと書かれています。また、山川港に入港した琉球使節団は、開聞神と「海の神々」を祀る枚聞神社へ航海のお礼を目的に参詣し、琉球国王の一族が琉球扁額を納めています。

また、慶長９年（１６０９）、島津義弘は、琉球出兵の折に８０余艘の船を山川港に集結させました。出兵前に枚聞神社で祈願しました。そして、翌年に枚聞神社の本殿等の改修をしています。

このように、平安時代に噴火をおこし「祟」を成すものとされた開聞岳（神）は、中世・近世には、航海安全の祈願対象となり、「海神」として崇拝されていったものと考えられます。

空中から見た開聞岳

指宿文化遺産図鑑
（史跡・有形文化財・天然記念物編）

令和３（2021）年３月

発行
指宿まるごと博物館実行委員会
鹿児島県指宿市十二町 2290 番地
TEL 0993-23-5100

印刷所
渕上印刷株式会社
鹿児島市南栄３丁目１-６
TEL 099-268-1002